

型総柱建物や庭園、石列、溝などを築いていました。庭園は、南側の丘陵裾の湧水地から扁平な礫を敷き詰めた土坑と溝で結び、そこから大型建物の間を通り東寄りに抜け、石を敷き詰めた池と思われる遺構に通じています（図1、写真2）。地方の鎌倉時代の遺跡で庭園が検出されることは稀であり、とても貴重な発見でした。

海岸側の調査区北東側では平安時代から室町時代の水田、溝などの遺構が見つかりました。水田は砂礫に埋もれた田面が3枚確認でき、上の第1、2面が鎌倉時代から室町時代で、その下の第3面が平安時代に営まれたものと思われます。水田は傾斜にそって棚田状に作られています（写真3）。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、土器・陶磁器（土師器・珠洲・青磁・白磁・青白磁、瀬戸・美濃など）、木器（漆器椀・漆器皿・箸・下駄・板草履・板材・網代・柱根など）、金属器（銭貨・刀子・釘・蓋・銅製部材など）、石器（石鍋、硯、砥石など）が出土しました。その中で、銅製部材には開いた傘を2本違えた傘紋が施してあり、この傘紋が鎌倉北条氏一族の名越氏を示す家紋である可能性があります（写真4）。文献史料によれば、13世紀末頃に越後国沼河郷（旧能生町、糸魚川市、青海町付近）の地頭として「備前々司殿」と記述があり、この「備前々司殿」は能登、安芸の守護など兼任していた名越宗長と推定されています。

今年の調査成果から、山岸遺跡は庭園を伴う大型の掘立柱建物や、傘紋を施した銅製品の出土、文献史料などから沼河郷地頭の名越氏に深く関係のある中心的な屋敷と考えられます。

（飯坂盛泰）



写真2 流れ(溝)と園池(右側)



写真3 水田跡

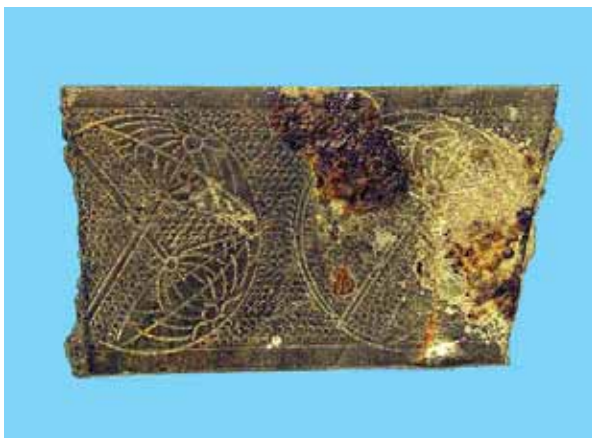


写真4 「傘紋」入り銅製品



写真5 網代